

■ アクセントの核と滝

共通語のアクセントの規則は次のとおりです。

①１拍目と２拍目は必ず高さが違う。

共通語では１拍目が高であれば２拍目は低、１拍目が低であれば２拍目は高になります。「高高」や「低低」で始まる語はありません。

②１語の中にアクセントの核がある場合は１か所しかない。一度下がったら二度と上がらない。

１語の中にアクセントの核は０個か１個です。「低高低低高低」のように１語の中で離れた２か所以上に核がある語は存在しません。

③最後の拍が高い語は、助詞（「ガ」など）をつけることによって区別が生じる。

はな（鼻）　　はな（花）

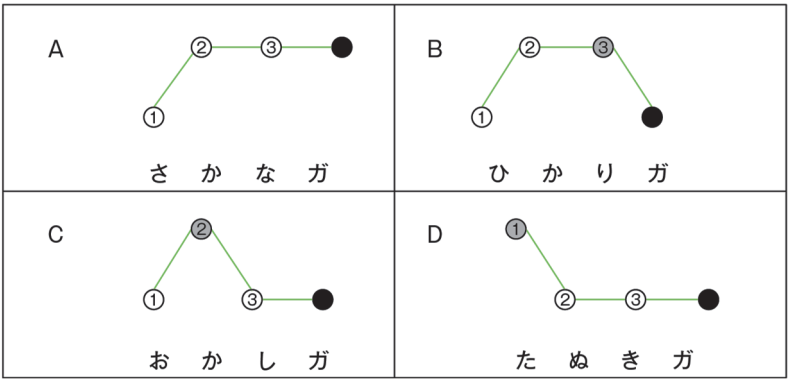
はなが（鼻が）　　はなが（花が）

「鼻」と「花」のように、語単独では同じアクセントのように見えても、助詞まで入れると別のアクセントの型をもっていることがあります。なお、「雲」と「蜘蛛」など、助詞を含めても全く同じ型の場合もあります。

アクセントの役割は二つあります。一つは「雨」と「飴」のように同音語の意味を区別する役割です。これを**弁別機能**といいます。もう一つは、語のまとまりや切れ目を意識させる機能です。例えば、「ニワトリ（がいる）」という音のアクセントの配置が「低高高高」と「高低低高」とでは、語の切れ目やまとまりの認識が変わります。「低高高高」では「鶏（にわとり）」と認識しますが、「高低低高」と聞こえたとき、通常「鶏（にわとり）」とは認識しません。なぜなら、規則②（１語の中にアクセントの核がある場合は１か所しかない）によって、どこかに切れ目があると判断するからです。よってこの場合は「２羽鳥（がいる）」だと認識します。このように、文中の切れ目やまとまりを意識させ文の構成を示す役割を**統語機能**といいます。

ア　アクセントの型

３拍の語の場合、助詞まで含めるとアクセントの型には次のパターンが存在します。（○…アクセントの核、●…助詞）



■ ３拍の語のアクセントパターン

ＡとＢは語単独では同じ型に見えますが、助詞をつけることによって違いが生じます。Ａのように、核がないものを**平板式**、Ｂ、Ｃ、Ｄのように核があるものを**起伏式**といいます。平板式には**平板型**の１種類が、起伏式には語末に核がくる**尾高型**（Ｂ）、語中に核がくる**中高型**（Ｃ）、語頭に核がくる**頭高型**（Ｄ）の３種類があります。

１拍から５拍の語のアクセントの型をまとめると、次のようになります。

第 16 章　音声試験対策

1　音声試験の概要

試験２には音声を媒体とした問題が含まれます。音声を媒体としますが、音声学・音韻論の分野にとどまらず、具体的な教授場面での指導法や文法に関わる知識も問われます。１問ごとにじっくり考える時間はなく、次の出題までの 10 秒ほどの時間でテンポよく解答していかなければならないため、事前の対策と訓練が非常に大切です。

音声試験は、パターンが決まっているため、対策が立てやすく、マスターすれば確実に点数を取ることができます。過去問の音声を、一語一音をまるごと覚えるまで繰り返し聴くことが有効です。

各問題の形式は次のとおりです。

問題１	学習者の発話を聞き、学習者の発話と同じアクセント形式を選ぶ。
問題２	学習者の発音上の問題点を選ぶ（拍の長さ、プロミネンス、アクセント、イントネーション、ポーズ、特殊拍など）。
問題３	学習者の発音上の問題点を選ぶ（口腔断面図、声帯振動、調音点、調音法、唇のまるめ、舌の高さ、舌の前後位置など）。
問題４	教師と学習者の会話、日本語母語話者同士の会話などを聞いて、問いに答える。
問題５	日本語学習者向けの聴解教材を聞き、出題意図や問題点を答える。
問題６	学習者の話す短い文を聞き、誤りの種類を選ぶ。

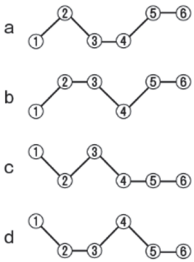
2　問題別の傾向と対策

⑴　問題１

問題１は、学習者の発話が２回流れます。問題冊子には発話と同じ文が書かれています。その文の中の、下線部で示されている部分のアクセントの型を選ぶという問題です。共通語の正しいアクセントを選ぶ問題ではありません。聞こえてくる学習者の発話と同じアクセントの型を選びます。

▶例題

１番　コーヒーは，濃(こ)くなければ飲めます。

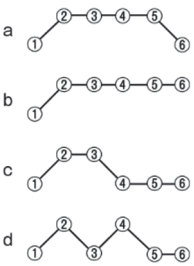


（令和２年度　日本語教育能力検定試験　試験問題より）

選択肢を見ると、１拍目と２拍目が「低高」「高低」の２パターンがあるため、まずは１拍目と２拍目に注目します。「こく」で「①高②低」が聞き取れたら、選択肢がｃとｄの二つに絞られ、３拍目「な」が上がるかそのままかで判断できます。この場合「な」は上がらずそのままです。よって正解はｄです。

▶例題

２番　これは，温(あたた)めるとおいしいです。



（令和２年度　日本語教育能力検定試験　試験問題より）

この問題は、１拍目が低、２拍目が高までは共通なので、高がどこまで続くかで判断します。この場合５拍目まで高が続き、最後の「と」で下がっています。よって正解は a です。

アクセントの型を聞き取る問題は、地域方言などの影響により、訓練をしなくても聞き分けられる人と、相当な訓練をしなければ聞き分けられない人がいます。この分野に苦手意識がある人は、まず自分で発音分けができるように練習しましょう。発音分けができるようになると、聞き分けもできるようになります。

発音分けは、まず２拍から始めます。２拍の語の場合、アクセントの型は「高高」「高低」「低高」の３パターンがあります。それぞれのアクセント型を「タタ」で発音します。２拍ができるようになったら、３拍、４拍と増やしていきます。「タ」で発音分けができるようになったら、次に「あめ（２拍）」「さかな（３拍）」「いのしし（４拍）」など、適当な単語でも練習します。最終的には、日本語教育能力検定試験の過去問を使用し、４つの選択肢を発音分けできるようになることを目指します。

Memo▶　「高高」は１拍目と２拍目の高さが変わらないということを表している。高低アクセントは隣り合った音との相対的な高さの違いで決まるため、ここでは「高高」と「低低」を同様のアクセント型として扱う。

STEP１

２拍　①タタ　②タタ　③タタ

３拍　①タタタ　②タタタ　③タタタ　④タタタ　⑤タタタ　⑥タタタ

４拍　①タタタタ　②タタタタ　③タタタタ　④タタタタ　⑤タタタタ
⑥タタタタ　⑦タタタタ　⑧タタタタ　⑨タタタタ　⑩タタタタ
⑪タタタタ　⑫タタタタ　⑬タタタタ

STEP２

２拍　①あめ　②あめ　③あめ

３拍　①さかな　②さかな　…

４拍　①いのしし　②いのしし　…